

## 上博楚簡『恆先』における氣の思想

竹田健二

### 序言

一九九三年に出土した郭店楚簡、並びに一九九四年に上海博物館が購入した楚簡（以下、上博楚簡）は、いずれも戦国時代中期に書写され、楚の貴族の墓に副葬されたものと考えられている。従って、両楚簡に含まれている文献の原本は、おそらく戦国時代初期以前には既に成立していたと推測される（注<sup>1</sup>）。中国古代思想史研究上、両楚簡の資料的価値が極めて高い所以である。

本稿執筆の時点で、上博楚簡は順次公開が進みつつある段階で、まだその全容は明らかになっていないが、『上海博物館藏戦国楚竹書（三）』（上海古籍出版社、二〇〇三年）によって古佚文献『恆先』が公開された。『恆先』は、従来知られていなかったユニークな宇宙生成論を説

き、またそれと密接に関わる形で氣概念を説く道家系文献として注目される。

そこで本稿では、戦国時代における氣の思想史的展開を解明する手がかりを得るべく、『恆先』において説かれている氣について検討する。あわせて、郭店楚簡、並びに既に公開された上博楚簡に含まれている他の道家系文献における氣について検討し、戦国時代初期以前の所謂道家に分類される思想家たちがどのような「氣」を説いていたのか、考察を加えることにする。

### 一 『恆先』における氣の思想

先ず『恆先』において説かれている氣の内容について検討する。『恆先』において氣が説かれているのは、以下の三つの箇所である（注<sup>2</sup>）。

(1) 01 恆先無、有質靜虛。質大質、靜大靜、虛大虛、自厭

不自忍、或作。有或焉有氣。有氣焉有有。有有焉有始。

有始焉有往者。未有天地、未有 02 作行、出生虛靜、爲

一若寂、夢夢靜同、而未或明、未或滋生。氣是自生、

恆莫生氣。氣是自生自作。互氣之 03 生、不獨有與也。

恆の先は無なるも、質・静・虚有り。質は大質とな

り、静は大静となり、虚は大虚とならば、自ら厭い

て自ら忍ばずして、或作る。或有れば焉なち氣有り。

氣有れば焉なち有有り。有有れば焉なち始め有り。始め

有れば焉なち往く者有り。未だ天地有らざれば、未だ

行を作すこと有らず。出でて虚静より生ずれば、一

為ること寂たるが若く、夢夢として静同にして、未

だ或は明らかならず、未だ或は滋生せず。氣は是れ

自ら生じ、恆は氣を生ずること莫し。氣は是れ自ら

生じて自ら作る。恆は氣の生ずるや、独りあとかと有らざるなり。

(2) 04 濁氣生地、清氣生天。氣信神哉。云云相生。信盈天

地。同出而異性、因生其所欲。察察天地、紛紛而 05 復

其所欲。明明天行、唯復以不廢。

濁氣は地を生じ、清氣は天を生ず。氣は信に神なる

かな。云云として相い生ず。信に天地に盈つ。同じ

きより出づるも性を異にし、因りて其の欲する所に

生く。察察たる天地は、紛紛として其の欲する所を復

む。明明たる天行のみ、唯だ復むも以て廢されず。

(3) 09 互氣之生、因 10 言名。先・者有疑荒言之。後者校比焉。

恆は、氣の生ずるや、言に因りて名づく。先んずる者は、疑荒有りて之を言うも、後るる者は校比す。

資料(1)は「恆先」の冒頭部である。ここでは、「恆」と「或」という二つの世界が設定されており、「恆」なる世界から「或」なる世界が生じて世界が轉換し、宇宙が生成されていったとする、他の文献には見られないユニークな宇宙生成論が説かれている注3)。

この宇宙生成論によれば、宇宙の始原は、「無」であるところの「恆」であり、「恆先」とは、「恆」という始原の段階の時期」を指すと考えられる。もつとも、「恆」は無であるとされているものの、実はその中に微少な「質・静・虚」が備わっている。そして、この三者はやがてそれぞれ増大し、「自ら厭あくとの悪感情を抱き、それを抑えることができなくなっていく。その結果、「或」なる世界が発生し、「恆」なる世界から「或」なる世界への轉換が起ころ。

この「或」なる世界への轉換には、「氣」の発生が伴わ

れる。そして「氣」の發生には「有」、つまり存在するということの發生が伴われ、また「有」の發生には「始」、つまり事物の始まりから終わりへの変化の發生が伴われる。更に「始」の發生には「往者」、つまり事物が根源から遠ざかることの發生が伴われる。すなわち、「恆」の世界から「或」なる世界への轉換が起きると、「氣」「有」「始」「往者」が相次いで、おそらくほぼ同時に發生するのである。

こうして『恆先』においては、氣の存在しない「恆」と、氣の存在する「或」との二つの世界が対比されるのだが、注目されるのは、「氣は是れ自ら生じ、恆は氣を生ずること莫し。氣は是れ自ら生じて自ら作る」、或いは「恆は氣の生ずるや、独り<sup>あずか</sup>与ること有らざるなり」と述べられていることから明らかのように、「恆」なる世界から「或」なる世界への轉換において、氣は自ら發生するのであり、「恆」が氣を發生させるのではないという点である。つまり、「恆」から「或」への世界の轉換は、「質・靜・虚」の増大を契機としているという点で連続性を持つものの、「恆」が「或」を生ずる、或いは「恆」が氣を生ずるといった、直接的な親子関係にはないのである。

以上のような『恆先』冒頭部の宇宙生成論において、「或」なる世界に存在し、「有」「始」「往者」とも密接

に結合するとされている氣は、基本的に万物すべてを構成するものであり、世界に存在するあらゆる事物・事象は氣によって構成されると考えられている。このことは、資料(2)において、天・地がともに氣によって構成されていると述べられていることから確認できる。

資料(2)では、氣には清濁の区別があるとされ、「濁氣は地を生じ、清氣は天を生ず」と、天は清氣によって、そして、天地が生成された後、神妙なる氣はさまざまに運動して次々と万物を生成し、万物が「天地に盈」ちて世界全体が生成されるに至るとされている。すなわち、『恆先』において、氣は天地だけでなく、万物すべてを構成するものである。

万物すべてが氣によつて構成されているとする思考を、ここでは、氣の思想と称することにする。この氣の思想は、万物それぞれが他の個物と異なる面を持つことを認めつつ、同時に万物すべてに共通する面が存在することをも説明可能な、巧みな思考といえる。かかる氣の思想を含んでいることにより、『恆先』は、万物それぞれは「性を異に」するものであり、また「其の欲する所に生く」、つまり万物はそれぞれ勝手に生きてゆくものではあるけれども、同時に万物は「同じきより出づる」ものとも位

置付けられているのである。

資料(3)は、難解な箇所であるが、万物と名との関係について、「先んずる者」と「後るる者」との差異について述べている箇所と考えられる。すなわち、「恆」は氣が生じた後、氣によって構成される万物に対して命名を行うが、「先んずる者」、つまり「恆」の段階では未だはつきりとしていなかった名は、「後るる者」、つまり人間によって「校比」され、さまざまな区別が設けられて細分化された、というのである。

なお、資料(3)には「恆氣之生」との句があるが、同じ句は資料(1)にも登場しており、これについて李零氏は「恆氣」を「作爲終極的「氣」、最原始的「氣」と、また龐樸氏は「道個本原之氣」としている<sup>(注4)</sup>。しかし、先述の通り、『恆先』では、宇宙生成の過程において世界の根源である「恆先」と「氣」との間に直接的な親子関係は無いとされているため、「恆氣」と熟語として解釈するのは無理があると思われる。

以上、『恆先』において説かれている氣の内容について検討してきた。その結果、『恆先』の氣は、「或」なる世界、つまり万物が様々な変化を繰り返り広げる世界において存在し、宇宙の始原である「恆」なる世界においては存

在しないものであった。そしてこの氣は、天・地を始めとするすべての万物を構成する、いわば物質的なものであり、そして氣には、少なくとも清・濁の区別が設定されていた。

もっとも、清・濁の氣の区別は、天地の生成に関して述べられているに過ぎない。他の事物や事象に関してもそうした清・濁の氣の区別が影響を与えているのか、或いは清・濁以外にも氣に区別があるとされていたのかについては、明らかではない。

それでは、以上のような『恆先』の「氣」をめぐる思考は、戦国時代初期以前の道家において、どのような位置を占めていたのであろうか。この点について検討するため、郭店楚簡、及び現時点で公開されている上博楚簡に含まれている道家系文献において、どのように「氣」が説かれているのか検討することにする。次章では、先ず郭店楚簡本『老子』の氣について見てみよう。

## 二 郭店楚簡本『老子』における氣の思想

郭店楚簡本『老子』の中で氣が登場するのは、次に挙げる甲本の用例一例のみである<sup>(注5)</sup>。

(4) 33 含徳之厚者、比於赤子、螻蟻虺蛇弗螫、攫鳥猛獸弗扣、骨弱筋柔而捉34固。未知牝牡之合然怒、精之至也。終日號而不嘔、和之至也、和曰常、知和曰明。35 益生曰祥、心使氣曰強、物壯則老、是謂不道。■

この部分は、今本『老子』の第五十五章に相当する。該当する部分の馬王堆帛書『老子』甲本・乙本並びに王弼本は、以下の通りである(注6)。

(5) 馬王堆帛書『老子』甲本

【含徳】之厚【者】、比於赤子。蜂蟻虺蛇弗螫、攫鳥猛獸弗搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡【之會】而股【怒】、精【之】至也。終日號而不嘔、和之至也。和曰常、知和曰明、益生曰祥、心使氣曰強、【物壯】即老、謂之不道、不【道早已】。

・馬王堆帛書『老子』乙本

含徳之厚者、比於赤子。蜂蟻虺蛇弗螫、攫鳥猛獸弗搏。骨筋弱柔而握固。未知牝牡之會而股怒、精之至也。終日號而不嘔、和【之至也】。知和曰【常】、知常曰明、益生【曰】祥、心使氣曰強、物【壯】則老、謂之不道、不道早已。

・王弼本

含徳之厚、比於赤子。蜂蟻虺蛇不螫、猛獸不據、攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而全作、精之至也。終日號而不嘔、和之至也。知和曰常、知常曰明、益生曰祥、心使氣曰強、物壯則老、謂之不道、不道早已。

第五十五章に相当する部分は、各テキスト間に若干の字句の異同が存在する。しかしながら、「氣」について述べられている「心 氣を使うを強と曰う」の部分は、テキストによる字句の異同はまったく存在していない。

「心 氣を使う」とは、人間が殊更に身体を強く盛んにしようとして、その身体を構成する気に対して意識的に、不自然な働きかけを行うことを意味し、ここでの「氣」は、人間の身体内部に存在し、人間の身体を構成する物質的なものであると考えられる。常識的には、人間が意識的に「氣を使う」ことによつて人間の身体を強くすることができると思われている。しかし、強く盛んになったものは必ず衰え、無理に強くした人間の身体は却つて弱まる。意識的な氣への働きかけがそもそも「不道」、つまり「道」から逸脱した行為に他ならないからである。この部分からは、人間の身体が氣によつて構成されているとの思考を窺うことができる。もっとも、用例自体

が少ないため、郭店楚簡本『老子』が人間の身体以外のものも気によって構成されていたとする立場に立っていたかどうかははっきりとはしない。しかしながら、基本的に郭店楚簡本『老子』は、万物は気によって構成されたとする、気思想に立脚していたと考えられる。

このことの傍証となるのが、郭店楚簡本『老子』には存在していないものの、今本の『老子』に存在する、次の二箇所、気の用例である。郭店楚簡本『老子』については、今のところ、抄出本であるとする説と、形成途上のテキストであるとする説とがある。しかし、浅野裕一氏が指摘するように、郭店楚簡本『老子』を形成途上のテキストと見るのは無理があり、郭店楚簡本『老子』が書写された時点で、馬王堆本とほぼ同じような『老子』のテキストが成立しており、郭店本『老子』はそこから何らかの目的で抄出されたものであるとみなすべきと考えられる<sup>57</sup>。従って、次に挙げる今本『老子』にのみ見える「氣」についても、郭店楚簡本『老子』が抄出される母体となった、今本『老子』とほぼ同じ戦国中期の完本『老子』において存在した可能性が極めて高いと推測される。

(6) 馬王堆帛書『老子』甲本

【戴營魄拘一、能母離乎。搏氣至柔】、能嬰兒乎。滌除玄鑿、能母疵乎。愛【民活國、能母以知乎。天門啓闔、能爲雌乎。明白四達、能母以爲乎】。生之、畜之。生而弗【有、長而弗宰、是謂玄】德。

・馬王堆帛書『老子』乙本

戴營魄抱一、能母離乎。搏氣至柔、能嬰兒乎。滌除玄鑿、能母有疵乎。愛民活國、能母以知乎。天門啓闔、能爲雌乎。明白四達、能母以知乎。生之、畜之。生而弗有、長而弗宰也、是謂玄德。

・王弼本

載營魄抱一、能無離乎。專氣致柔、能嬰兒乎。滌除玄覽、能無疵乎。愛民治國、能無知乎。天門開闔、能無雌乎。明白四達、能無爲乎。生之、畜之、生而不有、爲而不恃、長而不宰、是謂玄德。

(7) 馬王堆帛書『老子』甲本

【道生一、一生二、二生三、三生萬物。萬物負陰而抱陽】、中氣以爲和。天下之所惡、唯孤寡不穀、而王公以自名也。物或損之【而益、益】之而損。故人【之所】教、亦讒而教人。故強梁者不得死、我【將】以爲學父。

・馬王堆帛書『老子』乙本

道生一、一生二、二生三、三生【萬物。萬物負陰而抱



道家系と見られる古佚文献『太一生水』は、その前半部において、「太一」を世界の根源とする宇宙生成論が説かれている点が思想的に特に注目されている(注8)。

(8) 01 太一生水。水反輔太一、是以成天。天反輔太一、是以成地。天地〔復相輔〕02也、是以成神明。神明復相輔也、是以成陰陽。陰陽復相輔也、是以成四時。四時03復〔相〕輔也、是以成滄熱。滄熱復相輔也、是以成溼燥。溼燥復相輔也、成歲04而止。

太一 水を生ず。水 反りて太一を輔け、是を以て天を成す。天 反りて太一を輔け、是を以て地を成す。天地〔復りて相輔け〕、是を以て神明を成す。神明 復りて相輔け、是を以て陰陽を成す。陰陽 復りて相輔け、是を以て四時を成す。四時 復りて〔相〕輔け、是を以て滄熱を成す。滄熱 復りて相輔け、是を以て濕燥を成す。濕燥 復りて相輔け、歳を成して止む。

(9) 06 是故太一藏於水、行於時。周而或〔成、以生爲〕07萬物母。一缺一盈、以紀爲萬物經。此天之所不能殺、地之所08不能釐、陰陽之所不能成。君子知此、之謂：

是の故に太一は水に蔵み、時に行り、周くして〔成〕

すこと或り、「生ずるを以て」、萬物の母と〔爲〕る。一るときは缺き、一るときは盈たし、紀ぶるを以て万物の經と爲る。此れ天の殺ぐ能わざる所、地の釐す能わざる所、陰陽の成す能わざる所なり。君子は此を知りて、之を……と謂う

『太一生水』において説かれている宇宙生成論は、以下のような内容である。先ず太一が水を生じ、次いで、水は「太一を輔け」て天を生成する。天は、やはり「太一を輔け」て地を生成する。続いて、天と地とから神と明とが、神と明とから陰と陽とが、陰と陽とから四時が、四時から滄(つめたいこと)と熱とが、滄と熱とから濕と燥とが、濕と燥とから歳(年間を通してのあらゆる事象)が、それぞれ順次生成され、そうして世界が完成する。この時、太一は水の中に潜みかくれて、時空の隅々にまで行き渡り、万物生成のプロセス全体に関与する。太一は、天地や陰陽による関与を受けることのない、「万物の母」或いは「万物の經」たる絶対的な存在なのである。

太一を世界の根源とし、また水を重視する『太一生水』のこうした宇宙生成論は、郭店楚簡が出土するまで、古代中国において存在したこと自体が全く知られていなか



った。もつとも、この『太一生水』前半部で説かれている宇宙生成論において、直接的には氣は説かれていない。「陰陽」は登場するが、この「陰陽」が氣であるのかどうかは、直接的には述べられておらず、不明である。

『太一生水』において唯一「氣」が登場しているのは、『太一生水』後半部の次の箇所においてである。

(10) 下、土也、而謂之地。上、氣也、而謂之天。道亦其字也。

下は、土なり、而して之を地と謂う。上は、氣なり、而して之を天と謂う。道は亦た其の字なり。

ここでは、「下」、つまり「地」が「土」によってできているものであることが述べられた上で、「上は、氣なり」と、「上」、つまり「天」が氣によってできているとされている。ここでの氣は、明らかに天を構成するものであり、『太一生水』においても、氣が個物を構成するとの思考の存在が確認できる。

但し、『恆先』や今本『老子』においては、氣は万物すべてを構成するものであった。特に『恆先』において、天は「清氣」により、また地は「濁氣」によって構成されるとされていた。これに対して『太一生水』では、氣

で構成されているとされているのは天のみであり、地は氣ではなく「土」によって構成されると位置付けられている。地を構成するとされる「土」が氣の一種と考えられていた可能性も一概には否定できないものの、『太一生水』において、万物すべてが氣で構成されているとする氣の思想が存在するといえるかどうかは、問題が残るとしなければなるまい(注9)。

そもそも、『太一生水』は前半部で前述したような「太一」を宇宙の根源とする宇宙生成論が説かれているが、後半部では「太一」はまったく登場しない。また、後半部では、前半部においてまったく登場していなかった「道」や「天道」が登場する。こうしたことから、『太一生水』が文献全体として果たしてどの程度まとまったものであるのかについても問題がある。『太一生水』前半部にある資料(8)の「太一 水を生ず。水 反りて太一を輔け、是を以て天を成す」と、後半部にある資料(10)「上は、氣なり、而して之を天と謂う」とを敢えて整合的に解釈しようとするならば、資料(8)で「水」が「水」が「天」を輔け、是を以て天を成す」ということは、「水」が「天」を成す際にその姿を「氣」に変え、そうしてその「氣」が天を構成する、ということになるかとも思われる。しかし、こうした解釈も一応は可能ではあるが、定かでは

ない。

そのため、ここでは『太一生水』において、天だけを気によって構成されたものとする、部分的な形で気の思想が存在するとの指摘に止めておく。

#### 四 三文献の気思想と宇宙生成論

以上、上博楚簡『恆先』及び郭店楚簡『老子』・『太一生水』において、「気」がどのように説かれているのかについて検討してきた。その結果、『恆先』においては明らかに万物すべてが気によって構成されているとする思考、すなわち気思想が存在した。そして郭店楚簡本『老子』においては、人間の身体が気によって構成されるとの思考が確認でき、郭店楚簡本『老子』が抄出されるものとなった、今本『老子』とほぼ同じと考えられる完本『老子』において、やはり万物すべてが気によって構成されているとする気思想が存在したと推測された。加えて『太一生水』には、天が気によって構成されているとの思考が存在し、部分的な形で気思想が存在した。

これら三つの文献はいずれも、戦国中期に書写されたものと考えられており、従ってその原本は、戦国初期以前には既に成立していた可能性が高い。このため、戦国

初期以前に、天や人を含む万物が「気」によって構成されているとする気思想が存在し、所謂道家に分類される思想家たちがそれぞれ気思想を説いていたことは確実と見られる。

もつとも、『恆先』においては清気が天を、濁気が地を構成するとしていたのに対し、『太一生水』では天が気、地が土によって構成されていると説いていた。このことから明らかのように、三つの文献において、気思想が均一な形で説かれている訳ではない。それぞれの文献における気の説き方には違いが見られるのである。

特に顕著な相違は、宇宙生成論と気との関連の仕方についてである。

『恆先』においては、宇宙が生成する過程において気の有無の問題は極めて重大な意味を持つ。すなわち、気のない「恆」なる世界から「或」なる世界への転換が起こると、気が自ずから生じ、以後気は世界のあらゆる事象を構成するとされていた。

これに対して、郭店楚簡本『老子』においては、出土した部分には宇宙生成論と関わる気は説かれていないものの、郭店楚簡本『老子』が抄出される母体となった完本『老子』において、「道」が「一」を、「一」が「二」を、「二」が「三」を、「三」が気でできた「万物」を生

むといった形で、宇宙生成論と氣とが結びつけられつつ説かれていたと推測された。しかし、『老子』の宇宙生成論における氣の果たす役割については、『恆先』の氣ほど明確ではなく、かなり曖昧である。

また『太一生水』は、その前半部において、「太一」が最初に「水」を生成し、続いて天・地、神・明、陰・陽、四時、滄・熱、湿・燥、歳が連続して生成されるとの、独特の宇宙生成論が説かれているが、ここでは直接的には「氣」が登場していない。

このように、三つの文献においては、それぞれ異なる宇宙生成論が説かれており、その宇宙生成論と「氣」との関連の仕方は、それぞれ異なっている。おそらくこうした現象は、それぞれ独自の宇宙生成論を主張・展開した三つの文献の作者が、各文献が成立した時点で既に存在していた氣の思想を、いわば共通の前提として受容しつつ、それぞれの主張に適合する形にアレンジしたことを示していると推測される。

すなわち、氣の思想は、そもそも周王室に属する史官らが、上天・上帝の意思を窺い、天子を諫めるための理論として成立したものと考えられる(註16)。氣の思想は本来、世界の始原が何であり、そこからどのようにして世界ができたのかを説明しようとする宇宙生成論とは、直

接的には関係がない。現実に存在する事物や事象と天子がなすべき行為とを結びつけて説明せんとするものであったのである。

しかし、氣の思想は、それによって現実に存在するあらゆる事物や事象の成立を巧みに説明することができたため、宇宙生成論に容易に組み込むことができた。このため、『老子』『恆先』『太一生水』などの作者、所謂道家の思想家たちはそれを受容し、それぞれの宇宙生成論に組み込んでいったと考えられる。

もちろん、『恆先』『老子』『太一生水』の作者が主張する宇宙生成論は異なるパターンのものであり、受容した氣の思想の組み込み方は異ならざるを得なかった。『恆先』と『老子』の作者は氣の思想を基本的にほぼ全面的に受容しつつ、それぞれ「恆」「道」を始原とする宇宙生成論を唱えた。これに対して、水を重視する宇宙生成論を唱えた『太一生水』は、水の働きと氣の働きとの調整が困難であったために、部分的な形で氣の思想を受容するに止まらざるを得なかった。三つの文献において、万物が氣によって構成されているとする思考が共通して存在しながらも、宇宙生成論と氣との関連性に相違が見られるのは、こうした事情を反映していると考えられる。

『莊子』においては、「天氣」「地氣」「六氣」「雲氣」「春氣」「陰陽」の氣といった、天地の間に存在・運動し、様々な事象を生み出す氣や、或いは「志氣」、「血氣」、或いは氣息の氣といった、人間の身体内部に存在し、疾病や精神的作用などのさまざまな身体に関する事象を生み出す氣が数多く説かれている。例えば外篇の知北遊篇においては、「人の生や、氣の聚まるなり。聚まれば則ち生と為り、散ずれば則ち死と為る」と、個物の死生が氣の集散で説明されている。

また、『列子』においても、『莊子』同様、人間の身体だけでなく世界全体の様々な事象を氣で説明しようとする思考が窺える。特に注目されるのは、天瑞篇において、氣概念の登場する宇宙生成論が説かれている点である。

(11) 子列子曰、「昔者聖人因陰陽以統天地。夫有形者生於無形、則天地安從生。故曰、有太易、有太初、有太始、有太素。太易者、未見氣也。太初者、氣之始也。太始者、形之始也。太素者、質之始也。氣、形、質具而未相離、故曰渾淪。渾淪者、言萬物相渾淪而未相離也。視之不見、聽之不聞、循之不得、故曰易也。易無形埒、

易變而爲一、一變而爲七、七變而爲九、九變者、究也。乃復變而爲一。一者、形變之始也。清輕者上爲天、濁重者下爲地、沖和氣者爲人。故天地含精、萬物化生。」

ここでは、宇宙が生成される過程が、「未だ氣を見ざる」段階と、「氣の始め」なる段階とに区別されており、つまり氣の有無によって明確に区分が設けられている。しかも、「清輕」なる氣が天を、「濁重」なる氣が地を構成するとの思考が窺える。こうした点は、『恆先』における宇宙生成論と類似している。

以上のような『莊子』や『列子』に見られる氣に関する思考が、果たして何時頃成立したかという問題については、文献の成立の事情に関して慎重に検討を加えた上で考察する必要があるが、従来は概ね、戦国時代中期以降、場合によっては戦国末期よりも更に遅れて成立したと見られてきた。しかし、郭店楚簡並びに上博楚簡が出土したことにより、戦国時代初期以前に既に万物は氣によつて構成されているとする思考が確実に存在したことが、様々なパターンの宇宙生成論が氣の思想と結び付けられて説かれていたことが明らかになった。

従つて、『莊子』や『列子』の氣に関する思考が、戦国時代後期や、或いはそれ以後でなければ成立することが

できなかつたものとは、もはや考え難いと思われる。こうした伝世の文献を含めた、道家における氣の思想の展開の全容の解明については、今後の課題としたい。

## 注

- (1) 戦国楚簡研究会「戦国楚簡研究の現在」(『中国研究集刊』第33号、二〇〇三年) 参照。
- (2) 『恆先』の思想内容については、二〇〇四年六月四〜六日、大阪大学で開催された戦国楚簡研究会の例会(大阪大学)における浅野裕一氏の発表「上博楚簡『恆先』の道家的特色」、及び同年八月二十二〜二十四日、北京・清華大学において開催された「多元視野中的中国歴史—第二届中国史学国際会議」における浅野氏の発表論文「上博楚簡(恆先)の道家特色」から多大な教示を得た。また、『恆先』の引用は、基本的に馬承源主編『上海博物館藏戦国楚竹書(三)』(上海古籍出版社、二〇〇三年)の李零氏の釈文に基づくが、浅野氏の見解、並びに私見によって一部字句を改めた箇所がある。但し、煩雑を避けるため逐一の注記を省き、できる限り通行の字体に改めた。
- (3) 『恆先』の宇宙生成論については、注(2)前掲の浅野氏

発表及び発表論文による。

- (4) 李零氏の見解は、注(2)前掲の釈文による。また龐樸氏の見解は、『恆先』試讀(『簡帛研究HP』、二〇〇四年四月二十六日)による。
- (5) 以下、郭店楚簡本『老子』の引用は、基本的に『郭店楚墓竹簡』(荆州市博物館、文物出版社、一九九七年)による。
- (6) 以下、馬王堆本『老子』の引用は、基本的に『馬王堆漢墓帛書(老)』(文物出版社、一九八〇年)に、王弼本『老子』の引用は、『諸子集成』本による。
- (7) 注(1)前掲「戦国楚簡研究の現在」、及び福田一也「帛書系『老子』の成立事情—莊子後学との關係を中心に」(『中国研究集刊』第35号、二〇〇四年) 参照。
- (8) 以下、『太一生水』の引用は、注(5)前掲の『郭店楚墓竹簡』による。
- (9) 『国語』周語には、天地自然の間の氣の秩序を水と土とで説明する思考が窺える。拙稿『国語』周語における氣(『中国研究集刊』第8号、一九八九年)、「氣の思想の成立—『国語』における氣を中心に—」(『新潟大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』第32巻第2号、一九九一年) 参照。
- (10) 注(9)前掲の拙稿『国語』周語における氣、「氣の思想の成立—『国語』における氣を中心に—」、及び「兵家の氣の思想について—『孫氏の道』を中心に—」(『集刊東洋

学』第72号、一九九四年)、「墨家による気の思想の受容」(『中国研究集刊』第29号、二〇〇一年)参照。

〔付記〕

本稿は、平成16年度科学研究費補助金・基盤研究C「郭店楚簡・上博楚簡を中心とする戦国時代における気の思想の研究」による研究成果の一部である。